

## 21世紀の 世界都市 とは？

# 黒川紀章さんが考える これからのまちづくり

ドイツ、シンガポール、マレーシア、中国、カザフスタンなど世界の各地でまちづくりに取り組む黒川紀章さん。「共生の思想」を提唱する世界の建築家・黒川紀章さんに、快適な都市空間と二十一世紀のまちづくりの在り方についてお話を伺いました。



黒川紀章（くろかわ・きしよ） 一九四四年名古屋生まれ。京都大学建築学科を経て東京大学大学院博士課程修了。日本芸術院会員、カザフスタン共和国首相顧問、中国深圳市都市計画顧問。機械の時代から生命の時代への変革を貫いてきた活動が評価され、建築界のイベル賞ともいわれるフランス建築アカデミーのゴールドメダルを受賞。主な作品に国立文楽劇場、パンフレック・タワー（フランス）、クアランプール新国際空港（マレーシア）など。



「エコ・コリドール」が巨大ビル間に伸びる  
「ワン・ノース」の完成予想図

## 「エコロジー」と文化」が 街の起爆剤

私がマスタープランをつくり、現在シンガポールで進められているまちづくりに「ワン・ノース」というプロジェクトがあります。これは、シンガポールの中心部に位置する二百五十ヘクタールの広大な土地を再開発して、今までにないまったく新しい発想の街を世界で最初につくろうというものです。

ワン・ノースのコンセプトはバイオポリス、ICTポリス（テクノポリス）、メディアポリス、という三つの拠点地域をつくり、さらに、そこに今までにない人工の自然をつくらうというものです。人間だけではなくて鳥や昆虫、小動物などが通行できる通路を都市につくるものです。私はこれを「エコ・コリドール」（生態回廊）と呼んでいます。

起爆剤です。ワン・ノースのプロジェクトでは、いかにして世界のアーティストや学者、ミュージシャンなどのクリエイターを呼びこめるか、街をつくるか、その人たちが来て住みたいと思う街にできるか、それを基本に考えているのです。

その結果、世界中のアーティストや研究者がパリに注目して観光客が年間数百万人増えました。文化施設が観光産業を刺激したのです。



## 二十一世紀のまちづくり、 キーワードは「共生」

私はちょうど四十年前に日本で初めて「共生」という思想を提唱しました。今ではみんなが使っているようになりましたが、私の言う「共生」という考え方によってつくられた街は、まだ世の中に十分実現してはいません。

これからのまちづくりに必要なコンセプトは、まず「経済と文化の共生」です。文化と共生した街とは、文化施設や新しいライフスタイルを取り入れた街という意味ばかりでなく、歴史と共生している街でもあることが重要なことです。それは何も古いものを復活させるということではなく、新しい街の中に何となく、あ、こは

昔のレンガ街があったところかな、などと思わせる、記憶を思い起こさせるようなまちづくりの方法があるんです。これを私は心象風景のランドスケープと呼んでいます。それともう一つ、部分と全体の共生というコンセプトがこれからのまちづくりに必要です。例えば東京は三百の小さな都市の集合体であると

するので。札幌なら六十の小さな都市の集合体であると置き換える。札幌の中で特色のある地域をたくさん見つけて、それぞれの地域がより個性的になっていく方が街全体としては面白い。札幌という街を一つの個性でデザインするのではなく、六十の都市の集合体とする考え方を、部分と全体の共生」と私は呼んでいます。そして最後に言いたいことは、やはり「自然と人間との共生」、「自然と都市との共生」です。先ほど言った、エコ・コリドールという概念ですね。たとえば札幌という都市の中の自然を考えると、大きな大通公園が真ん中にある、中型の公園などが各地区にばらばらとあって、さらに子供のための小さい遊び場がばらばらある。しかしそれだと、昆虫や小動物が住みにくい街です。だからバラバラの公園や自然をつなげていくことがこれから大切になっていきます。

街中が緑のネットワークでつながっていかば、当然歩行者にとっても快適です。常に緑のあるそういう歩行者専用の道が整備されることによって、車と人との共生も可能になるし、さらに「自然と都市の共生」が可能になる。私はこれからのまちづくりにはこの視点も大変重要になってくると思います。

（談）